



ISHINOMAKI LOCAL VENTURE

2021

石巻ローカルベンチャー白書

特集

なぜ石巻はクリエイティブタウンなのか？

コンソーシアム ハグクミ



特集

なぜ石巻はクリエイティブタウンなのか

変わるしかなかったあの日から10年。この街は今もなお、未来を創造する多くの人の力によって復興のその先へ向かっている。「面白い人たちがたくさんいますよね」。石巻を訪れた人々の口から、いつしか当たり前に聞かれるようになったこの言葉。そう、ここは不思議な魅力に満ちた「クリエイティブタウン」。どうしてこうなったのか？この街で今、脚光を浴びる5組に5つの仮説をぶつけ、クリエイティブの源を解き明かす。

仮説1 街にたくさんの余白があるからですよね？

仮説2 目の前の海がエネルギーをくれるからですよね？

仮説3 山に未活用の資源があるからですよね？

仮説4 初期費用を抑えられて挑戦がしやすいからですよね？

仮説5 静かで集中できる環境があるからですよね？

特別対談 まだまだいるよ！石巻のクリエイティブな人々



仮説1

回答者
渡邊享子さん × よしだめぐみさん



仮説2

回答者
宮城了大さん (Active Life Lab)



仮説3

回答者
島田暢さん (鹿革クラフト工房「のんき」)



仮説4

回答者
若林明宏さん (石巻ホームベース)



仮説5

回答者
鈴木拓也さん (ウズマキ眼鏡珈琲店)



特別対談

石巻まちのコンシェルジュ
矢口龍太 × 阿部拓郎



仮説1

街にたくさんの余白があるからですね？



復興の力になった人々の創造力。使われていない不動産資源に新たな価値を付与してきた合同会社巻組は2020年、空き倉庫をアーティストの拠点「クリエイティブ・ハブ」に生まれ変わらせた。仕掛け人である巻組の渡邊享子さんと、ハブを拠点とするパフォーミングアーティストのよしだめぐみさんに創造力の原点を聞いた。

回答者
渡邊 享子 (わたなべ・きょうこ) 写真・左

1987年、埼玉県生まれ。震災後の石巻で合同会社巻組を立ち上げ、空き家リノベーションなど未活用資源の創造的活用を進める。

よしだめぐみ 写真・右

1997年、東京都生まれ。幼少から演劇に打ち込み、多摩美術大学を中退後、パフォーミングアーティストとして活動している。

どこにでもありそうな倉庫に、ギターを抱えた男性や、母親の手を引く小さな女の子、つなぎを着た若者、和装の年配の女性らが次々と吸い込まれていく。普通なら誰も寄り付かないようなこの場所は数カ月間で、長く活用されていなかった空き物件だった。

「ポートランドに行った時、地域の人が必要資材を持ち寄る場所を訪れたんです。そこでは子どもから大人までが元々はゴミでしかなかったもので、制作を楽しんでいた。新たな価値が生まれていく瞬間を目にしました」

震災後、空き家を改修し、シェアハウスや

ゲストハウスなどとして再活用してきた巻組。この経験を生かし、空き倉庫を若手アーティストの拠点である「クリエイティブ・ハブ」へと生まれ変わらせようと決めた背景には、渡邊さんのそんな記憶があった。

創造する力を一般化する

「クリエイティブ・ハブ」は拠点であると同時に、住居や拠点を無償提供されたアーティストが、地域に対して制作物や労働力などを還元する仕組み。渡邊さんは「ポートランドの光景を日本でも作り出すためには、物事に新たな価値を見出すクリエイティブな人材が絶対に必要だと思った」と強調

する。

新型コロナ禍では、多くのアーティストが活動機会だけでなく、労働の場すらも奪われた。実際、よしださんもそうしたアーティストの一人だった。「東京の仕事が全て白紙になりました。そんな時にハブの話を聞いたんです」。現在は巻組のゲストハウスに暮らしながら、パフォーミングアーティストとして活動。「アーティストにとって制作、発表の場は最も重要。それが担保されているからこそ本当にやりたいことを突き詰めることができます」と充実感をのぞかせる。

一方で、動き出したばかりの拠点を知る人はまだ少ない。そこで週末には不要品を



充実した表情で制作や地域との関わりについて語るよしださん



空き倉庫がアーティストと住民のつながりを生む空間となった



演劇をはじめ、さまざまな作品の制作と発表が繰り返されている

持ち寄る「物々交換市」を開くなどし輪の広がりを模索する。渡邊さんは「住民が必要資源を再利用したり、実際にアーティストと触れ合ったりできる。これを通じてクリエイティブな思考が一般化されれば、空き家などの社会問題解決の糸口にもなる」と見据える。

価値循環の先にあるリターン

震災後の石巻を訪れた人々がよく口にする言葉がある。「面白い人がたくさんいますね」。実際にはクリエイティブな人材は都市部の方が多いはずだが、日常的に出会う機会はほとんどない。「石巻はクリエイティブな人に会える街なんだと思いますよ」と渡邊さん。よしださんも「アーティストは孤立しがちですが、ここではたくさんの人と関わることができる」と話す。

ハブが目指すのはそうしたアーティストと市民のつながりを生み、クリエイティブな思考を当たり前にしていく役割。渡邊さんは「人は不便なものや壊れたものを見せられた時、どうしていいかわからず目を背けてしまう。でも、それを直したり活用したりする

楽しさを知ってほしい」と、街の余白だった倉庫から未来を描く。

震災10年で余白だらけだった街も大きく変わった。「確かにクリエイティブに余白は必要です。でも、時とともに分かりやすい余白は減りつつある。重要なのは『何を余白と思えるか』。これからは余白を見出して、課題を設定できる人材が求められると思うんです」

ハブを通して、巻組はアーティストへ、アーティストは地域へとそれぞれの力を還元する。この見返りを求めない循環の先で地域自体の価値が高まるからこそが巻組の待ち望むリターン。循環への一歩は踏み出されたばかりだが、よしださんは少し照れくさそうに笑う。

「私にはすでにたくさんのものが還ってきている気がします。だって、石巻にはただ住むだけのハウスじゃなくて、もう温かいホームがあるから。その分もっとお返ししないと、と思っているんです」

クリエイティブ・ハブ

石巻市住吉町1-1-15
creative-hub.jp



使わなくなった資材も別の誰かにとっては必要な資材となる



「社会課題の解決へクリエイティブ思考が重要」と話す渡邊さん



震災からの復興

回答

余白の多さよりも、余白を見出せる人材が集まっている。

仮説2

目の前の海がエネルギーをくれるからですね？



石巻といえば海の街。しかしそのイメージの強さの割には、海を守っていくという議論はそれほど盛んとは言えないかもしれない。そんな中、「環境活動家」という聞きなれない肩書きを名乗り、石巻から海や自然を守る活動を広めようとしているのが宮城了大さん。独自の道を突き進む背中を押しているものとは？

回答者

宮城了大 (みやぎ・りょうだい)

1989年、石巻市中里生まれ。ハワイ留学中に東日本大震災が起こり、Uターン。以後、被災者支援団体、ダイビングショップ、蛤浜を拠点とする「はまのね」などを経て、2019年「Active Life Lab」を設立。環境活動家としてゲストハウス運営など多方面で活動。

大きなガラス窓を開けると海風がフワリと流れ込んでくる。明るく広いリビングではこの日、宿泊客がパソコンを広げ、オンライン会議中。石巻出身、現在は神奈川在住の方で、帰省してきたけれど実家ではなく、このゲストハウス「Active Life -YADO-」に滞在しているとのこと。「うちには平日は仙台で働いて、週末になると泊まりに来てくださる方もいます。海の近くで自然を感じられるのがいいと」

爽やかな笑顔を浮かべながらそう語るのは、オーナーの宮城さん。市内中心部から車で10分程の渡波地区。防潮堤もあり海の姿は直接見えないものの、波音や潮風から

は十分海を感じられる立地。都会からリフレッシュに来るというのも頷ける。「でもここはただのゲストハウスではないんです。僕は環境活動家なので」

環境活動家。地球環境のために活動する人とイメージはできるが、耳慣れない肩書きだ。石巻で環境活動家を名乗る人はほとんどいない。でも宮城さんは「石巻だからこそ環境活動家になった」と言い切る。

もともとは市中心部に近い中里地区出身。「子どもの頃から父親に釣りに連れて行ってもらったりして、海はすごく身近な遊び場でした」。大学はハワイへ留学し、「サーフィンにハマってからはさらに海が近

い存在になりました」。

海が汚れているという衝撃

宮城さんが石巻に戻ったきっかけは東日本大震災。ハワイの大学に在学中だったが、いてもたってもいられず帰郷。被災地支援団体に所属しながら、親しんでいた海が激変したことに心を痛めていた。

この海を元通りにするためにはどうしたらいいのか？ そんな思いを抱いていた頃に女川町のダイビングショップ「ハイブリッジ」を知り、働くことに。オーナー・高橋正祥さんは海の瓦礫撤去などを行う団体「石巻海さくら」の代表でもあり、宮城さんも海の



開放的なリビング。リラックスして何かに集中できる環境



エコバッグは誰でも使えるように無料で貸し出している



床が高く上げられた、独特の外観を持つゲストハウス

清掃活動に関わっていく。「海の中がこんなにも汚れていることに衝撃を受けました。そこから海に限らず環境問題への関心も高まっていきました」

環境活動家への目覚めの時である。

楽しいを入りに環境問題へ

地球環境が大事であることはみんなが知っている。でも生活の中で環境問題に思いを巡らす機会が少ないのもまた事実だ。「だからこそ楽しいのが大事なんです」

宮城さんは現在、SUPやカヌーなどのアクティビティを通じ、海で遊ぶ楽しさを体験できる「Miyagi Outdoor Lab」を運営。「まずはアウトドアアクティビティを楽しんでもらう。そうすれば海を好きになってくれて、海や自然のことを考えるようになってくれる」。そう語る環境活動家が営むゲストハウスもまた「環境優先型」という独特の立ち位置。「ただのゲストハウスではない」というのはこのことだ。

リビングルームには大きな黒板に活動のコンセプトが。宿泊客が閲覧可能な本や冊子のセレクトにも、環境への意識が反映。

ゴミを減らすため、出入り口には宿泊者用エコバッグが吊るされている。「それぞれが小さなアクションを起こすきっかけを作りたい」。その思いがさりげなく、でもしっかりと詰め込まれている。

「YADO」と「Outdoor Lab」の両輪で走る宮城さんの「Active Life lab」。目標は「ここからたくさんの環境活動家を輩出すること」だ。石巻の環境活動家としての志は何に支えられ、挑戦へのモチベーションはどこから来ているのか。大好きな海からエネルギーをもらっているからだろうか？

「それは大前提としてあるけれど、今は環境活動家としての自分に何ができるかと考えること自体が面白いんです。それに石巻では世代の近い人たちがいるんな分野で頑張っているのがよく見える。負けたくないじゃないじゃないですか(笑)」

爽やさの中にキラリと光るプライドと野心。それは大きな海と石巻という地によって育まれた、宮城さん独自の魅力だ。

Active Life Lab

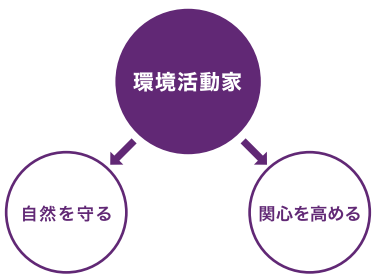
石巻市渡波浜曽根の巻47-1
www.activelifelab.com



この日は宿泊していた大学生にカヌーで海の魅力を伝える



海岸に沿うように。この角度でしか見られない景色がある



回答 海の力は大前提。環境活動家として挑戦すること自体が刺激的。

仮説3

山に未活用の資源があるからですね？



まだ日の昇りきらない午前6時。霧がかった山は静まり返り、歩を進めるたびに木の枝の折れる音が鋭く響く。獣の時間と人の時間が交わるような山の中を島田さんは迷いなく進む。

山の麓から罾の地点までは文字通り獣道だ。「新しい足跡と糞がありますね。季節ごとに食べる植物が違うので糞の状態も違います」。そう穏やかに話す表情は、まるで親しい友人を紹介しているようですらある。

罾の地点は、鹿のわずかな痕跡から都度変更している。1t近い強度のある4mmのワイヤーが、エサを目当てに足を踏み入れた鹿の足首をつかまえるという仕組みだ。

島田さんの朝はほぼ毎日がこの時間に始まる。鹿がかかる確率は罾の数に対して数パーセントにすぎず、月間狩猟頭数は12〜18頭。1日で3頭がかかったこともあるが、「運ぶのも大変」と白い息を吐きながら笑う。

鹿と、自然との命のやり取り

朝の山は静かだ。それゆえに罾の地点に着く前からそこにいる何者かの存在を鋭敏に感じられる。土を必死に蹴り上げる音、ワイヤーが張り詰める音に時折、甲高い鳴き声が重なる。

鹿と対峙することは、まさしく自然と対峙すること。「鹿と僕との命のやり取り。雄の

石巻では特技を生かした事業の立ち上げが盛んになっている。江戸時代以降、川と海を中心に急速に発展してきた街だけに、豊かな海に価値を見出す人々が多い。一方で、陸地に目を移せばそこにはまた豊かな農地や山々もある。震災後の移住者でハンターを主な生業とする島田暢さんのクリエイティブの源を探る。

回答者

島田暢（しまだ・とおる）

1982年、鹿児島県種子島生まれ。クレーン作業員などとして勤務した後、震災ボランティアを機に2011年10月に石巻に移住。現在はハンターとして鹿を狩猟し、加工するとともに、鹿革のクラフト工房「のんき」を運営。家具製作などの仕事も請け負う。

角に刺されれば僕がやられる」という言葉通り、島田さんの視線は目の前の鹿にだけ注がれる。

普段の柔和な表情から一転、高揚しながら引き締まったハンターの顔。罾がつながった木を何度も回ってワイヤーを絡めながら、鹿の動きを封じていく。ほとんど身動きが取れなくなった鹿の頭を木づちで叩いて気絶させ、脚を固定した後、頸動脈にナイフを入れる。まさに一頭と一人の命のやり取りが目の前で繰り広げられる。

なんでもやりたいんですね

鹿児島県の離島・種子島に生まれ、高校



道なき道を進み、前日に仕掛けた罾を回収していく

1t近い強度がある4mmのワイヤーが鹿の足首をつかまえる



「鹿も人間も同じ動物」と、命に誠実に向き合う島田さん

卒業後は名古屋市で大型クレーンの操縦士を務めた。ボランティアで石巻を訪れるまでは地元の農業法人に従事し、ボランティアが移住に変わったのは2011年10月。そして翌年6月、蛤浜の再生プロジェクトに関り始めたことが大きな転機となった。

蛤浜でのカフェ運営を皮切りに、周辺の自然を相手にする仕事も増えた中、有害鳥獣の現状を聞いた。調べると当時、捕獲された鹿はただ埋葬されていることを知った。「鹿も人間も同じ動物。命に誠実に向き合えないと」。そう思った時、ふと島田さんの頭によぎったのが、木こりだった祖父が遺した刃渡り80cmののこぎり。山の中にいる自分が、それまで以上に自然なことに感じられた。

島田さんは石巻で多種多様なスキルを持った人々から多くの知識や経験を得てきた。現在、ハンターを主な生業としながら、建築や動画撮影、金継ぎなど10以上の仕事を請け負う。

「なんでもやりたいんですね」。スキルを組み合わせていった結果、鹿肉の加工や卸だけでなく、鹿革のクラフト工房「のん

き」も開いた。クラフトでは作家とのコラボレーションにも力を入れながら他者のスキルも積極的に取り入れており、「信頼関係とスキルの掛け算で自分にしかできないことを増やしていている感じです」と目を細め、山と、鹿と、石巻と共存する。

山は資源の宝庫だ。だが島田さんは「未活用の資源が山にあると言っても、山には地権者がいて勝手なことはできない」と諭す。そして、「ここでもやはり大事なのは信頼関係。僕の場合はそうした繋がりに恵まれた場所が石巻であり、山だったんです」と打ち明ける。

山と山の間から日が差し込む場所に立って島田さんが振り向く。「この山だったら、この場所がお気に入りです」。その顔は逆光で見えなくても、不思議と笑顔であることは分かる。「じゃあ次の山にいきましょうか」。島田さんはそう言うと、木の枝が作る自然のアーチを抜けて再び獣道を歩いていった。

鹿革クラフト工房「のんき」

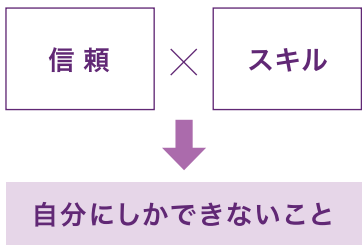
石巻市渡波栄田91（石巻ホームベース内）
dallfreelife.handcrafted.jp



捕獲した鹿の革を用いて作られた名刺入れやコインケース



石巻ホームベース内にある工房「のんき」で繊細な作業にあたる



回答

山に資源はあるが、信頼関係とスキルの掛け算があってこそ活用できる。

仮説 4

初期費用を抑えられて挑戦がしやすいからですね？



被災沿岸部で土地利用の方法が模索され続ける中、石巻の可能性に触れ、あえてそれらの土地に新たな拠点を設ける事例もある。若林明宏さんは保険会社勤務を経てものづくりを志し、石巻にたどり着いた。2020年には複合拠点となる「石巻ホームベース」を開設。国内外で活躍してきた若林さんが石巻を選んだ理由とは――。

回答者

若林明宏（わかばやし・あきひろ）

1969年、東京都生まれ。2018年に保険会社を退職後、家業である銚子若林商会の代表を務めるとともに、石巻を拠点にオーダーメイド家具の製造・販売を行う石巻工房でモノづくりを学ぶ。2020年に「石巻ホームベース」をオープン。自転車の受注生産工房も営む。

堤防と公園の整備が進む渡波地区の長浜海岸沿い。それほど近くに2020年10月、周囲の景観とは不釣り合いと言えるほどスタイリッシュな建物が現れた。深みのある黒を基調とした外壁に、温かみのあるウッドデッキ、屋内外には建物を引き立てるように洗練された木製の家具が並ぶ。大きなスライド式の入口を開けると解放感ある吹き抜け、暖炉、オーディオルーム……。ここが渡波地区の一画であることを忘れてしまうような空間が広がる。「この施設が私にとって最初の作品かもしれません」そう語るのは、この複合拠点「石巻ホーム

ベース」を運営する若林さん。東京都出身で、長く保険会社の海上保険部門に従事し、海外にも駐在してきた。震災当時の赴任地はニューヨーク。遠い母国の惨状を前にただ祈ることしかできず、「苦しかった」と吐露する。しかし、石巻に導かれることになったのは、その経験以上に陶芸家の姉と漆工芸作家の妹に対して抱いてきた憧れが大きい。「いつか自分もモノづくりを」。そうした思いをふくらませていた前職時代、複数のインテリア雑誌に載っていたある工房が目に入った。「石巻工房」。石巻で震災後に立ち上がり、世界的なデザイナーが支えている

企業だと知った。「モノづくりをするなら最初にパートナーとして声を掛けたい」。その名前をしっかりと手帳にメモした。

気付かされたこの地の特殊性

実家は、自転車の製造・販売業として1930年に創業し、自動車整備販売業を経て現在は不動産業を営む銚子若林商会。保険会社に勤めたのも、将来的に家業に生かせるとの思いからだった。

保険会社を2018年に退社し、踏み出したモノづくりの道。その年の5月に石巻工房の千葉隆博代表と東京で会った際、英語に精通した人材を求めていることを聞いた。



吹き抜けの解放感あふれる施設内にはカフェも



若林さんのオーダーメイド自転車工房では受注生産が始まった



渡波地区で一際洗練された外観が目立つ

そして7月には石巻に生活の拠点を半分を移し、工房のスタッフとして午前は海外との貿易折衝、午後は家具製作という日々が始まった。

若林さんが自身のモノづくりの将来像として思い描いていたのが、オーダーメイド自転車の製造・販売。「自転車が好きなのが一番の理由ですが、結果的に創業回帰になりました」。だが、工房の場所を石巻とすることは想定していなかった。気持ちに変化をもたらしたのは石巻で働き始めて実感したこの土地の特異性。「石巻には一流のクリエイティブな人材が集まり、他にない人脈が得られる。特に石巻工房は世界的に活躍するデザイナーとの仕事があるし、それに付随してカメラマンや編集者との付き合いも生まれてくる。これは石巻ならではの醍醐味だと思います」

モノづくりと不動産の情熱を

石巻への拠点設置を決める時、思い出したのが6年間滞在したマンハッタン。家賃の安い場所にアーティストが集まり出すと、次第にエリア全体が活気付いていくのを目の

当たりにした。「不動産とクリエイティブを掛け合わせると街が変わる。私もそれをやりたい」。そうして、モノづくりと不動産業の二つの情熱が融合した拠点が完成した。

施設には石巻工房のショールーム機能を持たせ、自身の自転車工房も設けた。2階には部屋ごとに異なるデザイナーとコラボレーションした4室のゲストハウスを備えた。

初期費用の点で石巻の土地価格は都市部に比べて明らかに安価だ。仮に都市部で同じ規模の建物を建てたら費用は数倍になるだろう。だが、若林さんは「それが直接的要因ではありません。石巻工房や石巻という街のおかげで、一流のクリエイターたちと出会い、一緒に仕事ができる。それこそが一番の理由です」と念を押す。

二線堤と公園の整備が進む窓の外。「ここはこれから素敵な通りになりますよ」。まだ周囲の景観に不釣り合いなこの施設が不釣り合いではなくなる未来が、若林さんの頭の中にははっきりと描かれている。

石巻ホームベース

石巻市渡波栄田91
ishinomaki-hb.com



施設の家具は全て石巻工房のプロダクト。ショールーム機能も担う



4人のデザイナーとコラボしたゲストハウスにもなっている

モノづくりへの憧れ

一流の人々との出会い

費用

回答

費用よりも国内外の一流の人々との出会いが原動力。

仮説5

静かで集中できる環境があるからですね？



「『眼鏡屋さん？』っていつも聞かれるんですよ」

観光客の少ない平日の午前。時間がゆっくりと流れるような「ウズマキ眼鏡珈琲店」のカウンターで鈴木さんは、自家焙煎のコーヒーを淹れながら苦笑する。

勘違いされやすい店名だが、愛着は強い。「眼鏡の鈴木です」。縁がなかった雄勝で復興応援隊として働き始めた当初、少しでも覚えてもらおうといつもそう名乗った。「眼鏡のすーさん」。いつしか地域住民からそう呼ばれるようになった時を、「受け入れてもらった気がしました」と懐かしむ。

再雇用を断って夢に向かう

震災では自宅も勤務先の水産加工会社も被災した。することがない中で足を運んだボランティア。そこで出会った一人の漁師との会話が、今思えば大きな転機だった。その彼は流れ着いたチェーンソーを直して使っていた。鈴木さんが「なんでそんなことができるんですか？」と聞くと、「海で船外機が止まったら直さないと死ぬだろ」とさも当然といった顔で返された。驚きと同時に湧いた知らない世界への興味。「もっといろんな世界を知りたい」。会社再建の知らせを受けても、再雇用は辞退した。

石巻市の街中から車で1時間弱の雄勝地区。その中心部に昨年、新たな観光・商業拠点「雄勝観光物産交流館」がオープンした。青々とした海に面したその施設の一角で香り高い珈琲を出す「ウズマキ眼鏡珈琲店」。震災以前は雄勝と縁のなかった店主の鈴木拓也さんに、この場所にこだわった理由を尋ねた。

回答者

鈴木拓也 (すずき・たくや)

1985年、石巻市新館生まれ。河南高校(現石巻北高校)を卒業後、地元水産加工会社に勤務。震災で会社と自宅が被災し、以降はがれき処理業務などを経て、雄勝地区の復興応援隊として従事。これを機に地域に魅了され、2020年、「ウズマキ眼鏡珈琲店」をオープン。

その後は建設やがれきの選別作業などに従事。それらがひと段落し、「次は自分のためになることをしよう」と思った時、震災前から漠然と抱いてきた夢を思い出した。

「コーヒー屋をやりたい」

雄勝地区の復興応援隊の求人票に「コミュニティカフェの運営」という文言を見つけて応募。その面接までの道中、折れ曲がったままのガードレールに市中心部との復興の格差を感じ、愕然とした。応援隊として「月刊雄勝新聞」を書くため多くの住民から話を聞くにつれ、伝統文化や風習、そして地域自体に惚れ込んでいった。

一方、人口が激減する中、商店主らの苦



シンプルで可愛い店のロゴマーク

落ち着いた内装の店内は地元住民にとっても憩いの場だ

トレードマークの眼鏡の奥の目を細める鈴木さん

労も身近で感じた。「泣きながら移転したご夫婦もいました」。人がいてこそ商売。鈴木さんを魅了した法印神楽などの伝統文化も人がいてこそ。「雄勝を知っている若い世代を増やさないと」。そうした思いが募った末に、「ただのカフェじゃない。地域を知ることのできるカフェだ」と夢が明確になった。水産加工会社に復職し、余暇を活用して焙煎を学んだ。県内のイベントに出店するようになってからも、店頭にはいつも雄勝のパンフレットを置いた。

「久しぶり」と「初めまして」

そして2020年7月、念願の店が開店。最初は観光客がほとんどだったが、時間が経つごとに住民も来てくれるようになった。鈴木さんは店内に飾られた作品を「これは波板のおじいちゃんが作ったみこし。これは大須のおじいちゃんが作ったひょうたん」と嬉しそうに紹介してくれる。

住民が集まる場所を失った雄勝において、店是这样した住民同士の再会だけでなく、新たな出会いの場にもなっている。この店ができるまでは、雄勝に通いで働く人々

が知り合う機会はなかったが、今では「もっとこうしたい」「こんなこともできそう」と地域への思いが自然と語られる場としても育っている。鈴木さんは「まずは話して互いを知ることが大事だと思うんです」と見守る。

施設の外に出れば一面の海だ。「静かな浜でたくさん考えることができたのは大切な時間だったかもしれません。だけど」。そう前置きして、「原点は『知る』ことだったと思います。知るから見えてくるものがあるし、もっと知りたくなる」と真っすぐに前を見つめる。

この店がなかったら聞こえることはなかった「久しぶり」や「初めまして」。そうした光景を前に「今が楽しいです」と素直な笑顔を見せる鈴木さん。そして、これからの雄勝を盛り上げるたくさんのアイデアを熱っぽく語った後、「あっ、これは自分のお店の話ではなかったですね」と最初と同じようにまた苦笑した。

ウズマキ眼鏡珈琲店

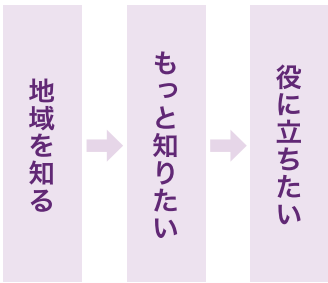
石巻市雄勝町下雄勝2-5(雄勝観光物産交流館内)
uzumakimeganecoffee.stores.jp



コーヒーはもちろん、「ベリーサンデー」もおすすめ



店が入った施設を出ると目の前には青々とした海が広がる



回答

地域を知れば知るほど、やりたいことが明確になってくる。

特集 なぜ石巻はクリエイティブタウンなのか

特別対談 石巻まちのコンシェルジュが教えてくれる

まだまだいるよ！石巻のクリエイティブな人々

「クリエイティブタウン石巻」を代表する人々に仮説をぶつけ、その創造力の源を探ってきた。だが、「石巻にはまだまだクリエイティブな人たちがいる！」と待ったをかけるのが、ISHINOMAKI 2.0「石巻まちのコンシェルジュ」の矢口龍太さんと阿部拓郎さん。2人だからこそ知っているクリエイティブな人材を紹介してもらった。

矢口龍太(やぐち・りゅうた) 写真・右

×
阿部拓郎(あべ・たくろう) 写真・左

「世界で一番面白い街をつくらう」を合言葉に活動するまちづくり団体ISHINOMAKI 2.0に所属し、石巻市の委託を受けて他地域からの移住定住の窓口や、石巻のPRを担う「石巻まちのコンシェルジュ」として活動。Youtubeチャンネルも開設し、クリエイティブに石巻の魅力を内外に発信している。

矢口 「石巻はクリエイティブタウンです」と言い切るのは少し照れくさいけど、いろいろな人を思い浮かべてみると、やっぱりクリエイティブタウンなんですよ。

阿部 特に石巻の旧市街地はすごい。どんな人でも一度関わってしまったら最後、嫌でも何かを生み出してしまうような印象すらある。巻き込まれ、巻き込む。まさにいしの「まき、！」

矢口 震災後すぐは、ボランティアの方々によって外からクリエイティブが持ち込まれたと思うんですが、今は石巻で発明されたものが外へと発信されるようにもなりました。

阿部 そして、それぞれが互いに意識し合って、「負けてられない！」という雰囲気すらありますもん。

石巻の旧市街地にスポット！

矢口 今回は主に石巻の旧市街地にスポットを当てて紹介していきたいと思います。まずは立町大通り商店街の「Tree Tree Ishinomaki」ですね。林屋呉服店の林貴俊さんが生み出す「石巻こけし」は今や全国区の人気と言っても過言じゃない。

阿部 「嵐」をはじめ、有名人が訪れるほどですからね。同じ立町大通り商店街で言えば、石巻

市こどもセンター「らいつ」^{※1}もクリエイティブな空間の一つじゃないですか？

矢口 うん、確かに。

林さんの作る「石巻こけし」は、赤と青のトリコロールカラーと石巻らしい魚模様！赤いほっぺが可愛いです！

阿部 子どもたちが発案した地域ぐるみのハロウィンイベントは、もはや秋の風物詩の一つ。

矢口 「らいつ」の建物自体も素敵だし、建物の使い方のルールも子どもたち自身で決めていくというのが新鮮で面白い！

阿部 バスケットコートやボルダリングやドラムセットまである。僕の学生時代にもこんな場所があれば……。

矢口 次に僕の注目スポットである富貴丁通り！なかでも、使われなくなった物を新しく生まれかわらせる「アップサイクル」の概念を発信する「月日工作舎」はユニーク。そして、その向かい側にあるのが「Cafe 蓮」。お洒落な外観や内装にこだわります。外に書かれているチョークアートも通るたびに楽しみなんですよ。

阿部 僕の注目はことぶき町通りですね。ここは震災後に始まった総合芸術祭「Reborn-Art Festival」^{※2}をきっかけに大きく変化した。民家を改築したギャラリー「石巻のキワマリ荘」^{※3}は、いつしか移住者というよりもアーティストが流れ着くような場所になっていますよね。行くたびに新しい顔ぶれが増えている。

矢口 そこから少し歩くとそのキワマリ荘の仕掛け人でもあるアーティストの有馬かおるさんたちが運営する「ART DRUG CENTER」もありますね。

阿部 著名なアーティストが出演してきたライブハウス「石巻BLUE RESISTANCE」^{※4}も見逃せません。実は壁に貼ってある支援者の名前の木札に、ミュージシャンの方々に交じっ

て僕の木札もあるんですよ。自慢じゃないですが、自慢です！

矢口 続いては広小路でしょうか。

阿部 ここには何と言ってもISHINOMAKI2.0が空きビルを改装して作り上げた「復興バー」があります。

矢口 内壁にはアーティストによるイラストが描かれていて、今も増え続けている。まさに石巻のクリエイティブの縮図のような場所です。

阿部 さらに中央一大通りの先に足を延ばせば2020年5月にオープンした総菜店「SONO」^{※5}もある。

矢口 いいですね。店主の小川奈津美さんの「石巻からオリンピック選手を」という視点からしてクリエイティブ。

阿部 あと、木工と裁縫が融合した「みち草工房」も面白い取り組みですよ。元は別々にやっていた二人がそれぞれの特技を生かしてタッグを組んだ。

矢口 石巻にはいろんなスキルを持った人がいるから、こうしたコラボレーションはこれからも次々と生まれるはずですよ。

阿部 拠点はないですが、街なかで活躍している面白い人としては、昨年、「Golden Good Stream」という映像配信会社を始めた岩田昇太さん。コロナ禍で多くのイベントがオンライン化するにあたって本当に心強い存在になっています。

矢口 今後も引っ張りだこになるでしょうね。

居酒屋以外の灯りがある通り

阿部 最後はISHINOMAKI2.0の事務所もあるアイトピア通り。ここは「クリエイターの巢窟」と言ってもいいくらいです。

矢口 通りを南から北に向かって紹介すると、全国にファンがいる料理店「四季彩食いまむら」^{※6}、旧市街地では唯一の本屋である「石巻まちの本棚」、シェアハウスや店舗を含む複合施設「COMICHI」、ITによる学びや街づくりを目指す「イトナブ」^{※7}……。



阿部 これら全部が震災後に新しくできた場所ですからね。



月日工作舎の山内健嗣さんの手に掛けられ、使われなくなった雑貨や家具も味のある魅力的な商品に！

※1 公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの支援で2013年12月に完成。子どもたちのアイデアを形にした石巻市の児童館

※2 一般社団法人APバンクと地元実行委員会が主催する食と音楽と芸術の総合祭。牡鹿半島を主会場に2017年から隔年で開催

※3 「Reborn-Art Festival」をきっかけに開設されたギャラリー。地域内外の作家による個展などが開かれている

※4 震災後の「東北ライブハウス大作戦」の一環で、多くの支援のもと、2012年10月にオープン。著名なミュージシャンが訪れている

アイトピア通りの中でも、新しく開通した内海橋との交差点付近は最注目です。例えば、オーダーメイドウェディングを手掛ける「石巻ウェディング」^{※8}もその一つですね。

阿部 最近是全国的にオーダーメイドの結婚式は注目されていますけど、ここでは特に地元の多彩なクリエイターが関わっていることが魅力です。

矢口 向かい側には市の指定文化財でもある「旧観慶丸商店」もありますし、また別の角には石ノ森萬画館を運営する株街づくりまんぼうの事務所も。

阿部 カフェを併設する複合施設「IRORI石巻」の上には石巻唯一の出版社である「口笛書店」もあって、こうして挙げていくと本当に集中してますね。

矢口 最近には夜にこの辺を歩くと明るいですよね。若い人たちが遅くまでクリエイティブして



空きビルを改装した復興バーでは、一日店長制度もあり、さまざまな「〇〇ナイト」が繰り広げられています！

阿部 なんだかうれしいですね。居酒屋以外の灯りがある街って。他地域で注目している場所はありますか？

矢口 渡波は気になりますね。新しいものがたくさん出来てきていて、車で走っていて楽しい。

阿部 僕は雄勝ですね。震災後に立てられたものすごい高さの防潮堤を野外上映のスクリーンに使わせていただいたり、地元住民の方々からいろいろなクリエイティブな動きがスタートしていて、非常に興味があります。



港町らしい刺激の循環を

矢口 改めて紹介してみると正直、自分たちでも驚くくらいのクリエイティブタウン(笑)。何が石巻をそうさせていると思います？

阿部 共振現象とでも言うか、互いに影響し合っているという部分は大きいんじゃないかなと思います。

矢口 そうですね。あとは、震災後のボランティアを機にIターンした人たちの存在は大きかったですよね。石巻に限らず、どの地域でも移住者が地元住民に受け入れられるかどうか、という問題は根強くあるんですが、石巻の場合は震災直後から何年にもわたって一緒に頑張ってきたという土壌があるんですよ。

阿部 だから地元の人たちも素直に応援できる。

矢口 そうしたIターンの楽しそうな様子を見て、石巻出身で外に出た人たちが「なんだ、地元でも面白いことができるんだ」って気付いてくれたような気がするんです。

阿部 交ぜてよってという気持ちが湧いてきてのIターン。

矢口 今後はどうなっていくと思いますか？

阿部 石巻では「移住！」「挑戦！」と勢よく言うよりも、良い意味でゆる～く新しいことが始められる雰囲気が出来てきているような気がします。

矢口 そうですね。その一方で、震災を機に石巻に来た人が、また別の次の場所に向かう流れもありますよね。コンシェルジュの立場からすれば「定住してください！」って言うべきかもしれないけど、むしろ素直に応援できる。そして、また帰って来たいと思われる街であり続けたいなど。

阿部 その気持ちは同じ。石巻を好きになって、新しい場所にチャレンジする。だけど、次の場所でも石巻のことを伝えてもらえれば、また石巻にも新しい人が来てくれる。そういう循環があることで、街はずっと新鮮で刺激的であり続けられると思うんです。

矢口 循環。まさに港町である石巻らしい！これからもこのクリエイティブの渦を大きくしていきたいですね。



※5 元床屋の建物をリノベーションして昨年5月に開店。店主の小川さんは「アスリートフードマイスター」の資格を持っている

※6 地域外からも訪れるファンがいる和食店。復興ボランティアを機に移住した今村正輝さんがこだわりの地元食材を振る舞う

※7 石巻から1000人のエンジニアを育成することを目指すIT団体。小中高校生へのIT教育にも力を入れている

※8 石巻ならではのオーダーメイドウェディングを提供。美容師やフローリストなど地元の各分野のプロが力を合わせる

石巻ローカルベンチャーリサーチ 2021

石巻で活躍するローカルベンチャーに焦点を当て、その特徴を徹底リサーチ。

石巻市内ローカルベンチャー事業者 28 社
にヒアリングし、その特徴や、創業の背景、
その傾向をリサーチしました。

【ヒアリング対象事業者】 *印は昨年度からの継続調査対象 調査時期：2020年11月～2021年2月

フィッシャーマン・ジャパン*

今野梱包株式会社*

もものうらビレッジ*

公益社団法人 MORIUMIUS*

株式会社草新舎*

一般社団法人イシノマキ・ファーム*

NPO 法人かぎかつこ PROJECT*

一般社団法人おしかリンク*

Tree Tree Ishinomaki*

株式会社石巻工房*

一般社団法人日本カーシェアリング協会*

一般社団法人石巻・川の上プロジェクト*

クマガイサイクル*

一般社団法人はまのね*

一般社団法人りぶらす*

愛さんさんビレッジ株式会社*

石巻うまいもの株式会社*

合同会社デザインナギ*

株式会社元気いしのまき*

株式会社海遊*

一般社団法人 ISHINOMAKI2.0*

合同会社巻組*

イトナブ*

一般社団法人ウィーアーワン北上*

のんき*

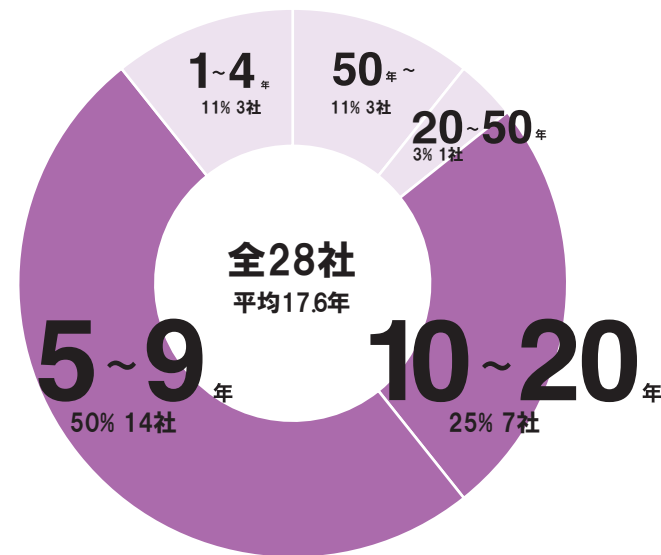
猫ハソーイング*

島津麺店*

有限会社若林商会*

石巻のローカルベンチャーの特徴

創業からどれくらい経つの？



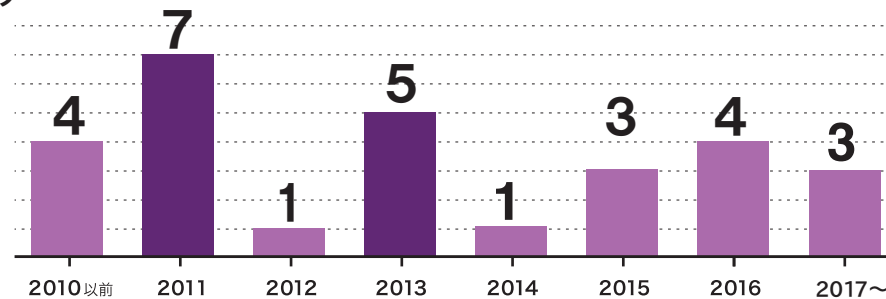
東日本大震災(2011年)を契機に生まれた石巻のローカルベンチャー

調査対象のうち創業から 5～9 年経過した事業者は 50% におよび、つぎに多いのが創業から 10～20 年経過した事業者でした。石巻のローカルベンチャーは 2011 年の東日本大震災を契機に生まれ、現在も活発に活動している傾向があります。

いつ創業したの？

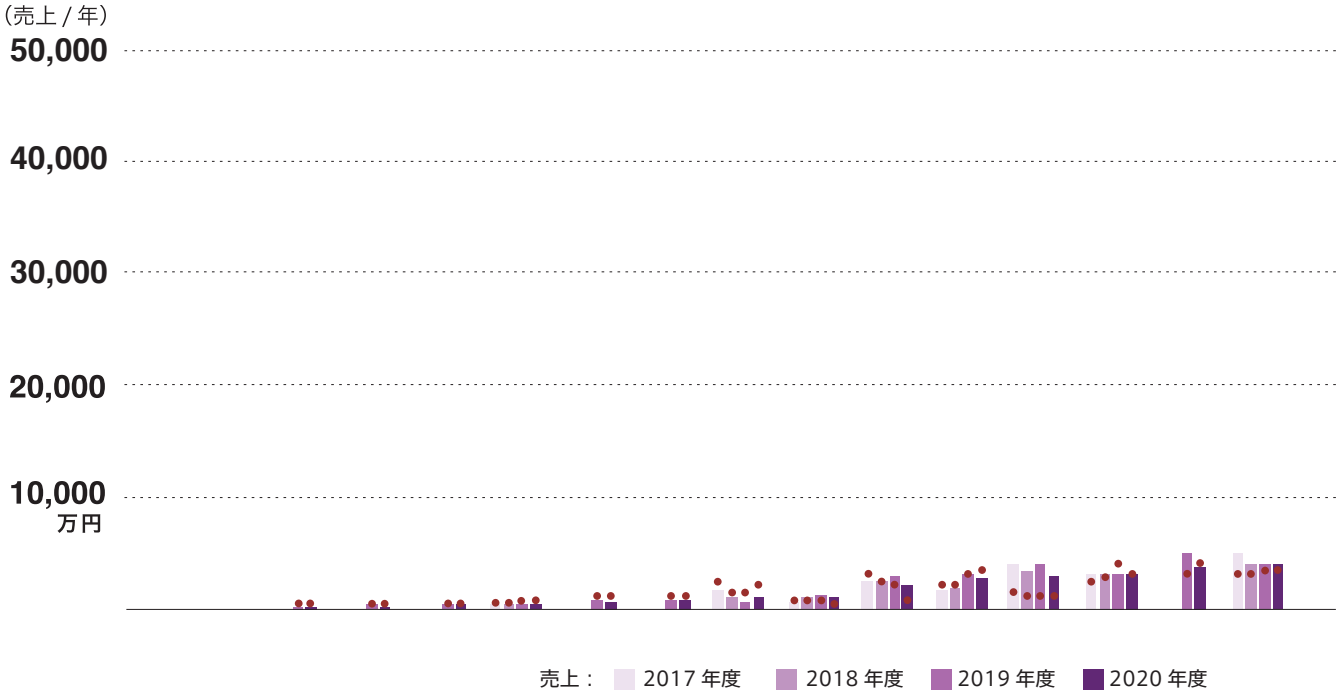
2011年、その2年後が創業のピーク

創業年の推移をみると、多くのローカルベンチャーが東日本大震災が発生した 2011 年に降に生まれていることがわかります。震災を契機に石巻のローカルベンチャーが増加したといえますが、そのピークは被災後の 3 年後という特徴的な傾向がみられました。

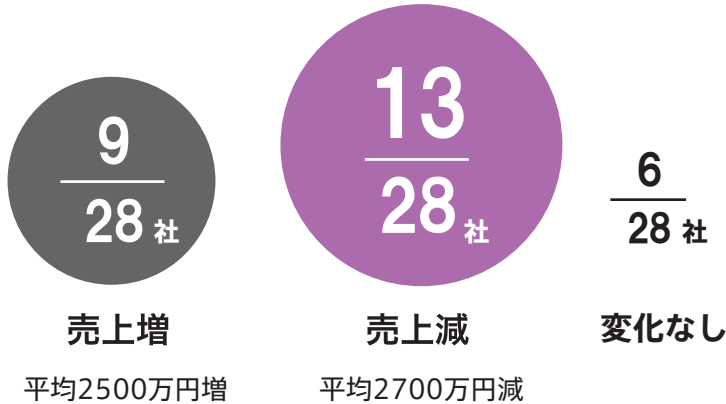


石巻のローカルベンチャーの特徴

どれくらいの売上規模と雇用があるの？

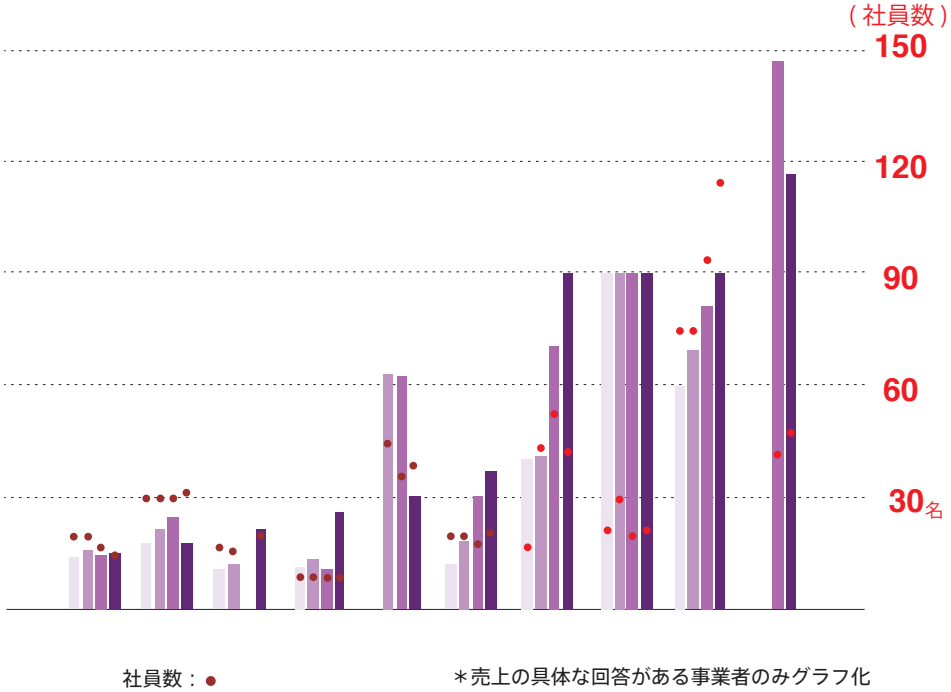


2020 年度の売上は？



2020年度はコロナ禍による影響大

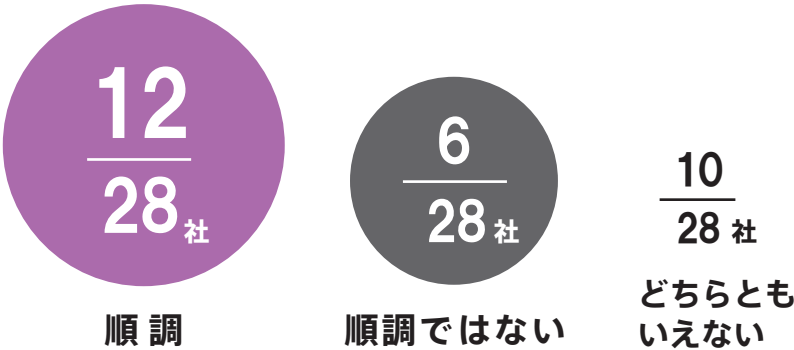
多くのローカルベンチャーがコロナ禍により売上を減少させた。売上減少が顕著にみられたのは、店頭での対面販売や、宿泊などをとまなう事業をおこなっている事業者。オンライン販売を精力的におこなっている事業者は売上は減少したものの、大幅な減少にはなりませんでした。



雇用の推移は横ばい

継続的な調査から多くのローカルベンチャーが売上規模を増加させていますが、雇用規模（社員数）は売上との相関関係は弱いと考えられます。それは利益率の改善や、創業間際のローカルベンチャーの社員ひとりあたりの生産性が改善されていることが考えられます。

事業は順調ですか？

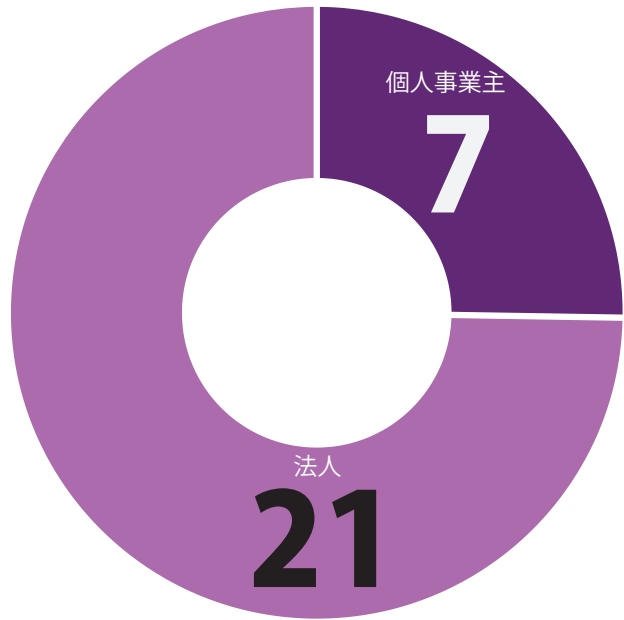


売上は減少しても順調

新型コロナウィルスの影響で、売上が減少しても、事業は順調と回答した事業者が多い傾向がありました。また事業が継続できていること自体が順調という回答もみられました。

石巻のローカルベンチャーの特徴

仕事を重ね合わせることによって、
多様な経験を蓄積するローカルベンチャー



石巻のローカルベンチャーの多くは法人ですが、個人事業主として、小規模ながら多様な社会課題に向き合っているローカルベンチャーも多いです。

どんな仕事を並走させているの？

- ・ もものうらビレッジ／土橋剛伸氏 → 漁師、もものうらビレッジ運営
- ・ Tree Tree Ishinomaki ／林貴俊氏 → こけし作家、呉服店経営
- ・ のんき／島田暢氏 → 鹿猟師、鹿革細工作家、大工
- ・ 猫ハソーイング／阿部史枝氏 → 洋裁、水産加工

個人事業主のローカルベンチャーの多くは地域のなかで多様な仕事やスキルを掛け合わせて、事業を継続させています。

コロナ禍で変化するローカルベンチャー



オンラインで他地域に展開

オンラインでコミュニティーシェアリングを他地域に導入する方法を発展させている。コミュニティーシェアリングのガイダンスを映像で制作し、タブレットを導入し遠隔でもスムーズにコミュニケーションをとることで、他地域への導入を加速させようとしている。

日本カーシェアリング協会



客層が変化した

地元の NPO などの団体による昼間の利用が増大した。研修や BBQ などの利用が増えた。テントサイトへの宿泊などアウトドアアクティビティの問い合わせも増えた。

もものうらビレッジ



オンラインで体験型商品を開発

鮮魚を漁港からダイレクトに配送し、オンラインで料理人が魚のさばき方や扱い方のコツを伝授。コロナ禍で外食需要が減るなか、家庭での魚食を推進。

フィッシャーマン・ジャパン



新たなサービスを開発

コロナ禍で新たに飲食店を支援するために生まれたテイクアウト WEB 受注サービス「テイクアウトマップ」をリリース。石巻外からの導入を要望する声も上がっている。

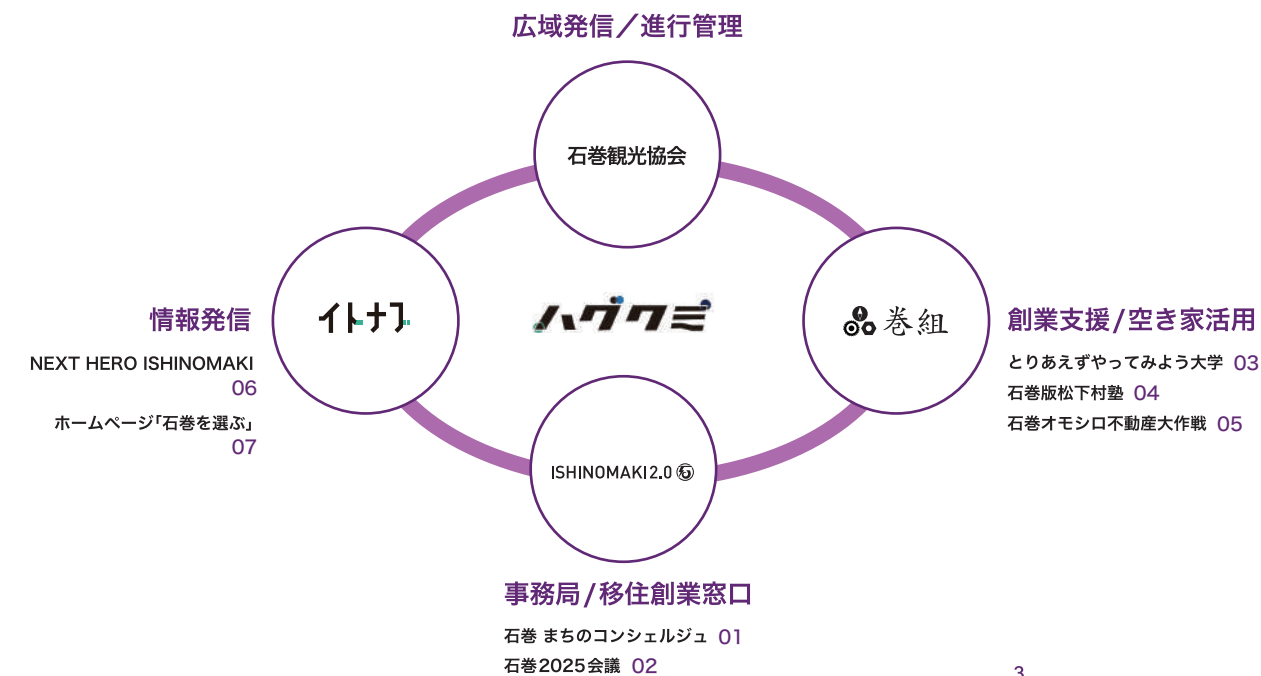
イトナブ

ハグクミによる 石巻チャレンジャー増殖作戦

コンソーシアム ハグクミ による石巻のローカルベンチャーを応援するプログラムを紹介します。

コンソーシアム ハグクミ

ISHINOMAKI2.0、イトナブ、巻組、石巻観光協会の4社による共同事業体。移住・定住の促進、ローカルベンチャーの推進、空き家活用、地域の情報発信など、多岐に渡る事業を展開しています。国内10以上の自治体に参加する「ローカルベンチャー推進協議会」の石巻事務局を務めています。



3

01 石巻 まちのコンシェルジュ

移住者の暮らしや住まい、仕事に関するサポートを担う、まちのコンシェルジュ。定住支援・創業サポート・空き家の紹介もおこないます。選択肢の多い石巻の強みを活かしたスピード感で、相談者の希望に全力で寄り添います。事業開始から2020年12月までに160件の相談があり42名が移住しました。

おためし移住ツアー

まちのコンシェルジュに相談すると、石巻をまるごと体験できるお試し移住ツアーをご提案いたします。IT や一次産業から六次産業まで、気になる仕事をおためしできるプログラム、働きながら滞在するワーケーションまで幅広く対応します。

YouTube チャンネル

コロナ禍のなか石巻魅力を発信するために2020年よりYouTubeチャンネルを開設し、クリエイティブに石巻の魅力を内外に発信しています。

YouTubeで「石巻まちのコンシェルジュ」を検索



阿部 拓郎 (あべ たくろう)

1987年12月4日生
石巻市出身
「石巻は様々なチャレンジに満ちた溢れた街です。それを応援することもコンシェルジュの仕事ですので、お気軽にご連絡ください」

矢口 龍太 (やぐち りゅうた)

1983年1月21日生
石巻市出身
「自分自身も東京からUターンしました。お仕事探しや家探しなど、経験を踏まえてご相談になればと思います」

[問い合わせ]

コンソーシアム ハグクミ
(一般社団法人ISHINOMAKI2.0)

電話: 0225-90-4982

メール: navi@ishinomaki2.com

窓口: 石巻市中央2丁目10-2 新田屋ビル1階 IRORI石巻



石巻まちのコンシェルジュ YouTube チャンネル



02 石巻 2025会議

さまざまなテーマで石巻の未来を話し合う公開座談会。2020 年度はオンラインでも同時配信し、「アフターコロナ」「地域経済」「教育」「移住・定住」「文化」をテーマにグラフィックレコーディングを交えながら議論しました。地域住民から移住者まで誰でも自由に参加することができる活発な意見交換と地域交流の場です。

【問い合わせ】

コンソーシアム ハグクミ
(一般社団法人ISHINOMAKI2.0)

電話：0225-90-4982

メール：navi@ishinomaki2.com

企画：合同会社デザインナギ



03 とりあえずやってみよう大学

University of “Don’t Think, Feel” = 「とりあえずやってみよう」という建学精神のもとオンラインで開校するセミナープログラム。石巻のユニークな起業家たちや、第一線で活躍するクリエイターたちが講師となって、立ち止まらずに「とりあえずやってみる」人を輩出することを目指しています。

<http://ishinomaki-iju.com/udtf/>



【問い合わせ】

コンソーシアム ハグクミ
(合同会社巻組)

電話：0225-24-6919

メール：info@makigumi.com



04 野生のススメ塾

旧石巻版松下村塾

石巻でチャレンジをする起業家を輩出するために生まれたスタートアップ支援講座。事業計画のブラッシュアップやブランドイメージづくりのノウハウ、資金繰りに必要な事業計画書の作成方法等、特別講師によるレクチャーとあわせて、コーディネーターが事業の立ち上げに並走して支援します。

<https://makigumi.wixsite.com/syoutakasonjuku>



【問い合わせ】

コンソーシアム ハグクミ
(合同会社巻組)

電話：0225-24-6919

メール：info@makigumi.com

05 石巻オモシロ不動産大作戦

石巻で心うごくままに事業を始める「オモシロい」起業家の生活と仕事の拠点を増やすためのプロジェクト。「マッチング」「起業支援」「リノベーション」の3点から空き家活用を場づくりのプロフェッショナルが全力で支援します。石巻にはまだまだ活用されないまま眠っている資産が沢山。空き家を活用して「何か」を始めたい参加者を募集。参加者のつながりから実際の空き家活用につながった事例も多数。

【問い合わせ】

コンソーシアム ハグクミ
(合同会社巻組)

電話：0225-24-6919

メール：info@makigumi.com

卒業生も活躍中！



小川奈津美さん (第2期生)

アスリートフードマイスターとしての経験を活かし、栄養が豊富な旬の野菜や、石巻の魚、海藻、肉などを使った惣菜屋「sono」をオープン。



横山翼さん (第3期生)

障がいのある方やそのご家族が低価格で利用できるサービスネットワークを構築するため、一般社団法人 Hito Reha を設立。理学療法士。



写真：古里裕美

06 NEXT HERO ISHINOMAKI

石巻でチャレンジする人たちを「ヒーロー」として紹介し、そのインタビューを集めたウェブサイト。ローカルベンチャーたちが活躍する街石巻で、ヒーローたちの活動や日々のライフスタイル、リアルな想いを伝えます。

<http://nexthero.jp/>



【問い合わせ】

コンソーシアム ハグクミ
(一般社団法人イトナブ石巻)

メール: info@itnav.jp



07 ホームページ「石巻を選ぶ」

ハグクミの最新情報はこちらから

石巻の暮らし方ガイド。石巻でチャレンジしたい方や移住を検討している方にむけ、石巻のイベント情報や、住まい、働き方など、気になる情報を随時発信。ハグクミの最新情報も発信しています。

<http://ishinomaki-iju.com/>



石巻ローカルベンチャー白書 2021

2021年3月31日 第1刷

編集

勝 邦義 (一般社団法人ISHINOMAKI2.0)

テキスト(特集)

日野 淳・近江 瞬 (株式会社口笛書店)

デザイン(特集)

三上 和仁・遠藤 和紀 (合同会社デザインナギ)

撮影(特集)

川崎 璃乃

リサーチ

一般社団法人ISHINOMAKI2.0

合同会社巻組

発行

コンソーシアム ハグクミ

令和2年度石巻市地域活躍支援推進事業

連絡先

一般社団法人ISHINOMAKI2.0

〒986-0822 宮城県石巻市中央二丁目10-2

電話 0225-90-4982 fax.0225-90-4983

<http://ishinomaki-iju.com/>

navi@ishinomaki2.com

取り扱いについて

本書の内容の一部あるいは全部を無断転載・複製・複写・インターネット上へ掲載することは、著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。本書のデータを引用する場合は、必ず出典を明記いただき、ハグクミまでお知らせください。